

風景林を活用した中山間地域の活性化についての研究

— 梶原町松原地区久保谷山風景林を対象として —

1190471 近藤 穂波

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

近年、日本では少子高齢化が進んでおり、特に地方の中山間地域では地方都市に比べ少子高齢化が急激に進んでおり、地域衰退や地域消滅が危惧されている。高知県梶原町も同様に高齢化による人口減少が問題視されており、地域活性化の取り組みが必要である。

今回研究の対象とした、梶原町松原地区は中心部からのアクセスが不便な場所であり、高齢化及び人口減少に関して早急な対策が必要とされている。梶原町は町域の91%が森林という貴重な資源を保有しており、かつて松原地区では、貴重な原生林を利用した活発な国有林事業が行われていたが、現在は縮小しその後の久保谷の森林への整備が十分とは言えない。

そこで、本研究では、久保谷山風景林と松原区住民との繋がりを明確にすることで維持・管理の課題を見出すこと。そして、その課題における解決方法から同風景林の新たな活用方法を提案することを目的とする。調査の結果、松原地区及び久保谷風景林の課題として、①地域資源を活用した松原地区の更なる活性化と②コアとなり得る人物（若者）がいないことが分かった。

そのため、久保谷風景林を核としたヘルスツーリズム事業の確立及び梶原町民へ積極的な利活用の方策等の取組が必要であると考えた。

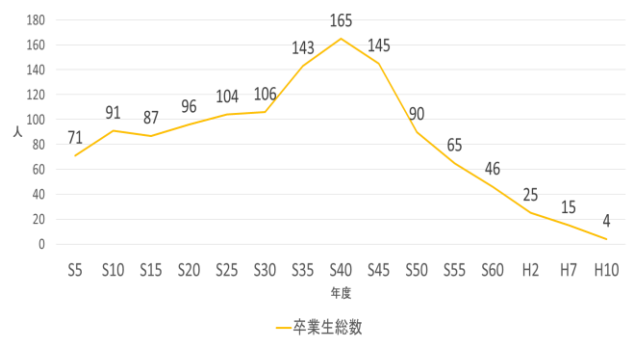
2. 背景

近年日本の各地において、少子高齢化による人口減少が起きている。その影響により地方の中山間地域では、地域が衰退し、地域消滅の危機にさらされている。

本研究で対象とした高知県高岡郡梶原町松原地区は、かつて国有林野事業が活発に行われ、林業が盛んな地区として賑わいを見せていた。

しかし、昭和39年の木材の輸入全面自由化以降、外国産木

材の輸入量増加や木材価格の下落及び林業の採算性の悪化等による国産材供給量の減少により、国有林野事業含め日本の林業は衰退の一途をたどった。これは、松原地区の衰退につながることになる。



【図1. 松原小学校の卒業生5年集計の推移】

図1のグラフは松原小学校の卒業生を5年集計でまとめたものである（平成11年より松原小学校が梶原小学校に統合）。昭和30年代頃から松原地区へ国有林野事業のため家族で移住してきたことにより増加傾向にある。また、国有林野事業の収縮が進むにつれて、松原小学校の卒業生数も減少している。現在、松原地区の人口は262人、そのうち65歳以上の割合は65%である（平成31年1月現在）。これは、梶原町の中で最も高齢化が高い地区となっており、少子高齢化及び人口減少に関する早急な対策が必要である。

現在、梶原町松原地区では、久保谷森林セラピーロードを核として地域活性化の取組を行っている。毎年、年に2回、新緑の時期と紅葉の時期に森林セラピーロードを利用したイベント「セラピー祭り」を開催している。セラピー祭りの際、松原地区には梶原町内外から観光客が訪れており、久保谷森林セラピーロードがある程度認知され、一定平均の観光客の定着に繋がっている。しかし、整備側の高齢化や人手不足により十分な手入れが出来ていないという現状がある。

また、この久保谷森林セラピーロード以外にも、梶原町の各地区で様々な健康をキーワードとした活動が行われており、梶原町全体で健康に着目した「ゆすはらまるごとクリニック」の方針を地域福祉の一環として掲げている。

本研究で対象とする久保谷山風景林という地域資源の活用方法を考えるにあたり、現在の梶原町の町政策のひとつである健康再生をキーワードとして、久保谷風景林の今後の方向性を考えるきっかけとする。



【写真1 紅葉祭りでのセラピーロードイベント】

3. 目的

本研究では、梶原町松原地区の久保谷風景林を対象とし、久保谷国有林と地域住民との繋がりを明確にし、今後の同風景林の維持・管理における課題を見出す。

そして、そこから抽出した課題への解決方法から、同風景林の今後の可能性、活用方法を提案する。

4. 研究方法

本研究は以下の手順で行う。

- ① 梶原町松原地区をフィールドとし、既往研究や統計調査をもとに梶原町松原地区および久保谷山風景林の概要を整理する。
- ② 梶原町松原地区の地域住民や久保谷風景林の管轄する林野庁四国森林管理局四万十森林管理署梶原森林事務所へヒアリング調査を行い、松原地区や久保谷山風景林の現状や維持・管理の課題を見出す。
- ③ ②で行ったヒアリング調査結果で得たことをふまえて、

元ゆすはら応援隊の方へヒアリング調査を実施する。

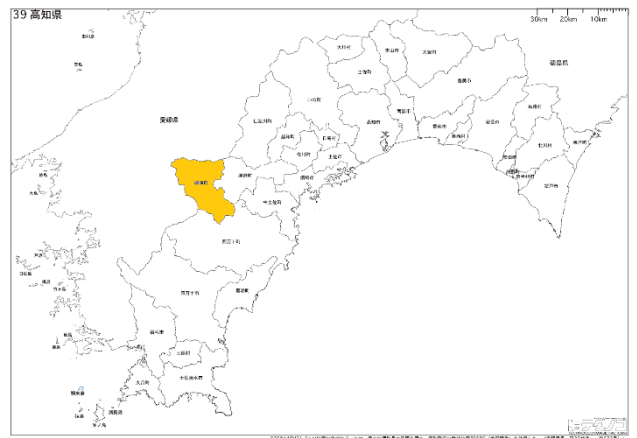
- ④ ②、③で行ったヒアリング調査で上がった久保谷山風景林に対する課題の解決方法を考察し、同風景林の今後の活用方法を提案する。

5. 地域の概要

5-1 梶原町の概要

梶原町は、高知県西部の高岡郡に属しており、町面積の91%を森林が占める自然豊かな町である。日本三大カルストである「四国カルスト」では全国的にも珍しい高位高原カルスト地形になっており、手付かずの自然が至る所に残っており、自然の醸し出す幻想的な美しさが町内外の人を魅了している。

また、平成3年から兵庫県西宮市と友好交流協定を結んでおり、ゆすはら応援隊を要請したり、文化交流事業を開催したりと今でも交流関係がある。人口は（平成31年1月現在）3,475人、そのうち65歳以上は1,516人（高齢化率43.6%）のであり、高齢化の進む梶原町の中でも最も高齢化率の高い地域である。



【図2. 梶原町の位置】

<http://technocco.jp/>（最終閲覧日2019年1月17日）

四万川地区、越知面地区、西地区、東地区、初瀬地区、松原地区の6つの地区で成り立っている。梶原町の地域的特性として四万川区、越知面区、西区の北部地域は道路整備も進んでおり、中心街のある東区へのアクセスが便利である。一方、初瀬地区、松原地区の南部地域は、中心街からも離れていることや、国道も通っているが一車線道路と狭いことで、同じ梶原町でも中心部に行くまでに、車で40～50分かかる。



【図3 梶原町6区の地図・位置関係】

5-2 松原地区の概要

松原地区は梶原町南部に位置しており地区住民の半数以上が70歳以上の超高齢化地域である。梶原町内でも最も高齢化が進んでおり、町開発が遅れている地域である。

しかし、松原地区は、北部、中心部の地域と比べても様々な天然の観光資源を有している。先ほど挙げた久保谷森林セラピーロードや八百とどろ、そして今回調査対象として取り上げる久保谷山風景林など自然美を活かした魅力的な観光スポットが多数ある。



【写真2 久保谷森林セラピーロード】

平成24年には、松原地区唯一のガソリンスタンドの存続危機に直面したことに対して、地域住民の出資により「株式会社まつばら」を設立し、通常のガソリンスタンドとしての

運営の他、地域の雇用を創出するような取組を行っている。その事業の一環として、平成25年には、地域住民が主体となった「集落活動センターまつばら」、を開所し、地域の問題解決と魅力向上に向けての協議ができる場を設け、地域でお金が回る仕組みづくりや、住民主体の地域づくり、積極的に活動できる団体へのサポートなどを重点的に推進している。

5-3 久保谷山風景林の概要

久保谷山風景林は、四万十町（旧窪川町）、梶原両町の行政界周辺に位置している。林野庁は全国の国有林の中から山岳、溪谷、湖沼など一体になった美しい森林やスポーツに適した「レクリエーションの森」として選定し、国民に広く森林に親しんでもらえるように、積極的に活用することとしている。

風景林とは、6種類ある「レクリエーションの森」の中の一つである（表1）。風景林に指定された箇所は、名所、旧跡、社寺等の背景や景観展望地点等から望見される森林で、特に風致の維持に配慮する必要がある地域となる。

久保谷山風景林は、94～219年生のモミ、ツガ、ヒノキなどに広葉樹を交えた天然性針広混交林からなっている。区域の中部を林道（県道）が通過し、行政界付近の林道沿いにある「春分峠」から望む四国山地の山並みや四季折々に変化する天然林、一斉人工林の森林の美しさに優れた地域である。

この久保谷山風景林は、四万十森林管理局四万十管理署梶原事務所が管理している。

【表1 レクリエーションの森の種類とその特徴】

林野庁 より引用

レクリエーションの森 種類	特徴
自然休養林	特に風景が美しく、保健休養に適している地域
自然観察教育林	森林環境教育や自然観察に適している森林
風景林	名所、旧跡等と一体となった景勝地を形作ったり、展望台等から眺望される美しい地域
森林スポーツ林	森林とふれあいながらスポーツ

	を楽しめる森林
野外スポーツ地域	雄大な自然と新鮮な空気の中で、スキー、テニスなどのスポーツで爽快な汗を流し、リフレッシュできる
風致探勝林	山岳、湖沼、溪谷等が一体となった美しい自然景観を楽しめる森林で、遊歩道等を散策し、様々な樹木や四季折々の自然の織りなす彩りを味わえる

6. 先行事例

6-1 ゆすはらまるごとクリニック

梶原町では健康に着目した取組が行われている。梶原町では町全体を森林の中での健康再生を実施するにあたり、一地区一品に取り組んでいる。

東地区の太郎川公園をクリニックの拠点として、同じ東地区の雲の上のプールや温泉、平成30年にオープンした雲の上の図書館内にも小さなボルダリングスペースがある。その他は、松原地区の久保谷森林セラピーロードはもちろん、越知面地区では廃校を利用したキャンプができる宿泊施設、四万川地区、西地区ではジビエ（キジ肉、シカ肉）、初瀬地区では韓国との交流経験を活かしたキムチ作りやチムジルバン（岩盤浴）と地域の強みを活かした取り組みがなされている。

各地区の集落活動センターを拠点に、森林や温泉、スポーツを通して健康再生を目的とし、地域資源を活かして地域施設と人が連携することで人と人との絆を深める場を提供している。

6-2 地域資源を活かしたヘルスツーリズム事業

近年、豊かな自然環境の中で、心と体を休めることで生活習慣を見直すきっかけとして健康にテーマにした旅「ヘルスツーリズム」が注目を浴びている。

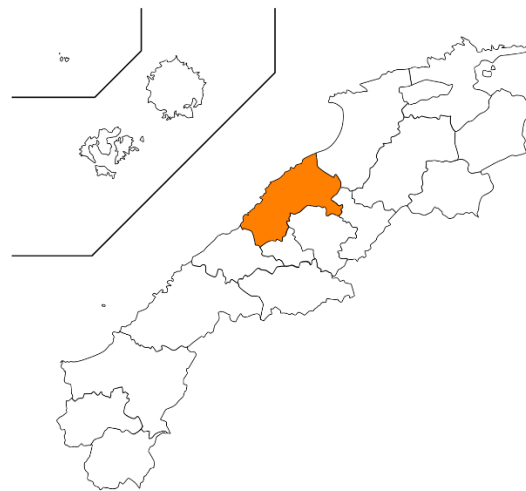
平成30年度からNPO法人日本ヘルスツーリズム振興機構と一般法人の日本規格協会日本スポーツツーリズム推進機構の3者で構成されるヘルスツーリズム認証委員会が「ヘルスツーリズム認証」の交付を始めた。

この制度は、旅のプログラムが楽しく、安心・安全で健康回復や増進につながるプログラム構成になっているかを同委

員会が評価し、これから旅をする人の参考にしてもらおうという制度である。ヘルスツーリズムは地域の資源を活かした旅を提供するものであり、豊かな自然や温泉、地元食材などを組み合わせたプログラムで、地域資源を活用した健康プログラムとして、地域活性化の起爆剤としても“健康産業”が注目されつつある。

6-3 島根県大田市のヘルスツーリズムプログラム

日本海に面した島根県大田市は世界遺産である石見銀山や国立公園三瓶山、鳴り砂で有名な琴ヶ浜など、豊かな地域資源に恵まれており、大田市は平成30年10月にヘルスツーリズム認証に選ばれた。大田市の豊かな土地を活かした“OHDAmade（おおだまで、オーダーメイド）”の旅を企画し、健康への気付きを与える新たな演出を行っている。プログラムの内容としては、参加者の健康チェックを実施した後、国立公園三瓶山で森林の中のウォーキングをしたり、キュッキュと音が鳴る砂浜の琴ヶ浜でのウォーキングをした後、カヌーをしたりするようなプログラムを行った後、昼食は地元食材をふんだんに使用したランチを楽しむなど魅力的で充実した健康づくりができるコースを数種類用意している。



【図4 大田市の位置】

6-4 先行事例のまとめ

現在梶原町では「健康」に着目し、自然豊かな地域資源を活用した取組が実施されている。そして、全国的にも近年注目されているヘルスツーリズムプログラムの取り組みで、「地域」がピックアップされ、健康をキーワードとした新しい地

域活性化方策として期待されつつある。近年、日本では、働き方改革など労働環境の改善が進められているが、サービス残業問題などが完全に解決されたとはいい難く、日本の構造的な問題として残されている。その中で、「健康」を前面に押し出すメリットとして、日本の構造的な問題を解決する一歩としての期待もある。

この取組の中で、地域住民が主体となって活動することができるようになり、住民側が直接活動に関わることで一体感が生まれ、地域が活気づくと考えた。

7. 松原地区及び久保谷山風景林の現状

7-1 現地調査

現地調査概要	
日時	平成 30 年 6 月 19 日 (火) 天気：雨
対象	久保谷山風景林
目的	久保谷山風景林の自然的特性や現状の把握

久保谷風景林で現地調査を行った結果、久保谷風景林では雨が降っており、久保谷山風景林内の歩道は、一面に広がっている雨に濡れた落ち葉の為大変滑りやすく、普段山道を登り慣れていない人がこの道を通るのは危険であると感じた。今後ここを活用する際には、安全に歩行できるよう整備していく必要があると考える。



【写真3 久保谷風景林 出入り口】

また、風景林入口に地図看板が立てられていたが、看板が割れていたり、雨で文字が薄くなっていたりする等被害がでている。こちらも同様に改善していく必要がある。



【写真4 久保谷風景林 ルート案内看板】

これ以外にも毎月1回の頻度で松原地区の集落活動センターにおいて高齢者の健康に関する取り組みが行われている。

7-2 久保谷山風景林を利用したイベント

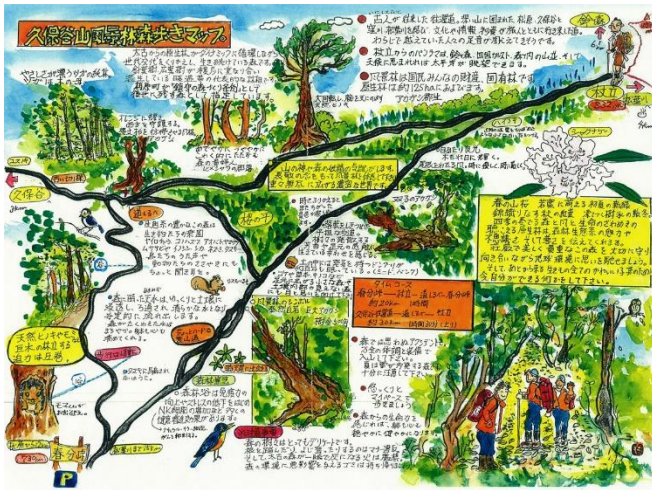
梶原町主催で現在開催されている久保谷山風景林を利用したイベントは存在しない。隣町の四万十町(観光協会)は、久保谷山風景林を活用した「松葉川山シャクナゲトレッキング」イベントを毎年行っている。このイベントは、5月のシャクナゲの季節に、久保谷山風景林区域内に自生しているシャクナゲを見るためにガイド付きでトレッキングを行う。参加費が必要となるが、四万十町で有名な松葉川温泉の入浴券が付いてくる特典もあり、大変人気なイベントである。

しかし、このイベントは四万十町観光協会主催のイベントであり、行程として風景林を散策した後、松原地区に立ち寄らずにそのまま四万十町に戻るため、松原地区の住民が直接的な恩恵を受けていない。

久保谷山風景林は、イベント時以外でも、入山、散策することは可能である。四国森林管理局職員森下嘉晴さんが描いた森歩きマップ(図5)というものもあり、イベントがない時でも久保谷風景林を身近に感じ、利用してもらおうという姿勢も感じられる。

以上をまとめると、松原地区住民と久保谷山風景林との関係性は、一部の地域住民のみが利用しているのみであり、関

係性が薄い状態となっている。



【図5 久保谷山風景林森歩きマップ】
公益社団法人森と緑の会 より引用

7-3 地域住民の久保谷山風景林への活動実績

● まろうど会の組織概要及び活動実績

松原地区住民と久保谷風景林との関係性と現状を明らかにするため、現在松原地区で精力的に活動をしているまろうど会の方にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査概要	
日時	平成30年11月17日(土)
対象	松原まろうど会在籍の方々(会長:下元廣幸氏、松原区長:松山栄喜氏、榑原森林事務所:森田晃喜氏)
目的	松原まろうど会組織概要及び久保谷山風景林への活動実績について調査する

松原まろうど会は平成19年に久保谷地域で昔使われていた用水路脇の小道がセラピー基地認定を受けたことがきっかけに、当時松原地区長を務めておられた下元廣幸氏を中心に、地区住民により平成21年に結成された。

現在では、久保谷森林セラピーロードの窓口として同セラピーロードの維持・管理やセラピーロードのガイドを中心に松原地区に入ってくる客人(まろうど)をもてなす活動を行っている。

セラピーロードに関する事以外にも、地域のイベント事にも中心となって行うなど、地域を元気にする活動を積極的

に行っている。会員は26名在籍(内セラピーガイド認定者は6名)で会員のほとんどは松原在住だ。

松原まろうど会は非営利団体で、ほとんどの活動をボランティアで作業しているため、他にメインでの仕事を持ちながら自分の可能な範囲で活動に参加している会員たちが多い。また、会員のほとんどが60.70代の高齢者で、活動を引き継ぐ後継者がいないことも問題となっている。

松原まろうど会での活動は非営利な活動だけに強制はできず、下元さんは施設の老朽化の整備や他にもやりたいことはたくさんあるが、人手不足のためセラピーロードでの活動にしか手が回っていないということが現状である。久保谷山風景林での活動も行っていたが、人手不足で手が回らないことに加えて、国有林であるために管理者以外の人たちが勝手に整備出来ないこともありなかなか手が出しにくいという印象があるとのことである。

● 四万十森林管理署榑原森林事務所の活動実績

次に、久保谷山風景林の管理の現状について、同風景林を管轄する四国森林管理局四万十森林管理署榑原事務所森林官の森田晃喜氏にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査概要	
日時	平成30年12月5日(水)
対象	四国森林管理署四万十管理署榑原事務所森林官 森田晃喜氏
目的	森林管理署職員から見た久保谷山風景林の今後の展望と榑原町の森林に対する取り組みについて調査する

その結果、長い歴史と貴重な天然木が数多く存在する久保谷山風景林が現在、松原地区に貢献できていないと感じているため、もっと地域住民に貢献できる国有林にしていきたいということであった。

久保谷山風景林を誰が管理しているかを知らない地域住民もおり、そのため地域の方に興味を持ってもらえるような活動に取り組み地域住民との関わりを増やし、自分たちが生まれ育った松原の森林をもっと身近に感じ、活用しやすいような森林をつくっていききたいと話していた。

以上を整理すると、森林管理署が主体となった久保谷山風

景林を利用したイベントは行われていない。

しかし、近隣の久保谷セラピーロードは、セラピー祭りやセラピー観光など比較的に利用されている側面があることから、利用法を検討することで、久保谷山風景林も地域住民との距離が短縮されるものと期待できる。

7-4 梶原町の森林に対する取組

梶原町は町の総面積のうち約91%を森林が占め、そこから流れる川々は清流四万十川を支えている。

梶原町の森林の多くは昭和30年代に積極的に植栽された針葉樹の人工林であるが、カタクリ等の高山植物、ムギラン等の希少植物及び老齢の巨木を有する天然林も残っており、多様な機能・特徴を有している。

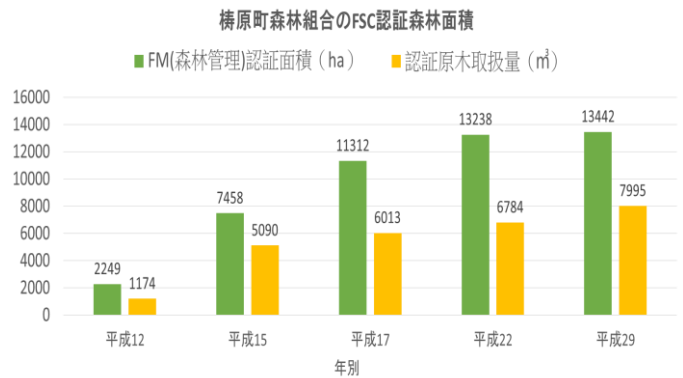
梶原町ではその豊かな森林（資源）を将来にわたり維持し、住みやすい町づくりを実現するために、森づくりの基本理念と基本方針を明らかにした「梶原町森林づくり基本条例」を平成12年に制定した。

条例制定以降、環境保全に配慮し、経済的にも持続可能な森林経営を推進する為の森林・林業に関わる様々な施策が取り組まれている。

その取組の一つが、森林資源の適正管理の指標になるFSC（Forest Stewardship Council：森林管理協議会）認証取得の推進である。FSC（森林管理協議会）とは、国際的な森林管理の認証を行う協議会のことである。

梶原町森林組合では、森林環境への関心が高まっている中で、日本国内でいち早く森林の管理に取り組んだ結果、平成12年10月に団体としては初となるFSC森林認証を取得した。

現在もFSC認証森林面積及び認証原木取扱量は年々増加しており、この取組が地域活性化において大きな役割を果たしている。



【図6 梶原町森林組合のFSC認証森林面積】

7-5 地域おこし協力隊、集落支援員の可能性

ヒアリング結果の現状における課題から、今後の管理主体の方向性を探るために、以前梶原町でゆすはら応援隊として活動を行っていた垣内なつき氏にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査概要	
日時	平成31年1月16日（水）
対象	梶原町教育委員会事務局（元ゆすはら応援隊） 垣内なつき氏
目的	ゆすはら応援隊での活動内容と地域おこし協力隊（集落支援員）の今後の可能性について調査する

垣内なつき氏は平成24年10月から3年間の任期でゆすはら応援隊として活動していた。

元々は梶原町と友好交流協定を結んでいる兵庫県西宮市の出身で、同時期に同じ西宮市出身の方を含めた3名で梶原町に移住した。垣内氏はゆすはら応援隊として、初瀬地区の担当として初瀬地区の集落活動センターの立ち上げの支援をすることが主な活動内容だった。地域住民との信頼関係構築のために行事ごとにはほとんど顔を出していたこともあり、住民との関係性は良好であったようだ。

御自身がゆすはら応援隊として活動していた経験から、次の応援隊（支援員）に求めるものとして専門性よりも地域住民が受け入れやすい人間性が合う人が第一優先だと話していた。また、ゆすはら応援隊や支援員の役割として、地域の中心となり地域のために貢献してくれている人の支えとなり、地域のサポート役として徹することが大切であると考えているようだ。また、地域の初瀬地区の現状として、中心となっ

て活動してくれているリーダー的存在の方が高齢で、後を引き継いでくれる人がいないことが問題となっている。これは、松原地区でも同じ問題であると考えられる。この問題を解決するためにも、活動したことに対してきちんと報酬を払うこと、地域の一人が全部仕事を担うのではなく地域全体で協力できる仕組みづくりが重要ではないかと考えられる。

8. 地域住民と久保谷山風景林の繋がり現状

ここまでの既往研究やヒアリング結果から、久保谷山風景林と住民との関係性が明らかになった。

久保谷山風景林は、国有林野事業が盛んに行われていた時代は、松原地区の住民の重要な産業の場となっていたが、国有林野事業が縮小した現在は久保谷山風景林と地域住民との関わりは薄くなりつつある。住民と久保谷風景林との繋がりは松原地区の中にある国有林という意識で自由に入出りできないものという印象がある。

一方で、風景林の近隣に位置する久保谷セラピーロードは、松原まろうど会が定期的に管理しているのに加えて、セラピー祭りを開催するなど松原地区の住民が比較的に利用しやすい環境にある。

反面、風景林の一部を構成している四万十町は久保谷風景林を利用したイベントなどを開催しており、久保谷風景林との関係性を有している。このため、松原地区の住民が風景林をより利用できる環境づくりが求められる。



【図7 久保谷風景林をめぐるステークホルダー】

9. 松原地区及び久保谷山風景林の課題

ここまでの3回のヒアリング調査と、数度の現地調査を行った結果、松原地区における久保谷山風景林の現状が明らか

になった。

- 久保谷山風景林内の歩道状況の悪さ

現地調査の結果から、久保谷山風景林の道状況が悪く、森林の中で怪我をしたり、転落をしたりする可能性も出てくる。多くの人に利用してもらうためには、滑りやすくなっている原因である落ち葉の除去や道幅を広くするなどの整備を行っていく必要がある。

- 地域団体の活動状況の課題

松原地区で活動している地域団体である松原まろうど会も人員不足を理由に、久保谷山風景林の整備まで手が回っていない。松原まろうど会の内部でも、積極的に地域のために動いている人と自分の可能な範囲での活動を行っているメンバーなど取組の程度が様々である。地域住民が自分たちの今の生活に満足していること、および主体で活動していたメンバーが高齢となり以前よりは活発に行動できなくなっていることの2点があげられ、このことが、松原地区の活性化について精力的に活動出来ない要因であると考えられる。

- 松原区の次世代の後継者問題

松原地区では、これまで何もアクションを起こさず、衰退の一途をたどっていたわけではない。地域の中心となる人物（下元さん）となり、これまでの経験を活かした豊富な知識を持っている人はいるが、下元さんも高齢となり、それをサポートし、外部に発信できるような下元さんの後継者となる（下元さんよりも）若い人物は現在松原地区にはいない状態である。

- 国有林野事業からの歴史的背景

過去において久保谷山風景林は国有林野事業が行われていた地域であり、風景林の利用という視点から見ると魅力的な地域資源であると認識されていないと考えられる。

以上の問題点から、①地域資源（久保谷山風景林）をこれまで以上に利用した地域活性化方法と②松原地区のコアとなり得る人物（若者）が必要という2点が松原地区及び久保谷山風景林の主な課題であることが明らかになった。この2点を中心に解決策を考える必要がある。

10. 提案

現在、梶原町では、町全体を「健康」のキーワードで整備を行っている。そこで、梶原町松原地区久保谷風景林を有効

に利活用する方策として、「ヘルスツーリズム」プログラムを提案する。以下にその概要を示す。

10-1 久保谷山風景林の今後の方針案

久保谷山風景林の現状から、地域住民が地域の誇れる資源をあまり自覚しておらず、興味を持っていないというような問題点があげられた。そして、この方針を核として、松原地区住民が主体となり、住民が地域のためにお金を落とす取り組みが出来るような環境を整えたい。

10-2 久保谷山風景林の今後の方針における全体構造

① 久保谷山風景林利活用に関する協定

久保谷山風景林の抱える課題を解決するため、松原地区住民（団体）が久保谷山風景林を活用するには、梶原町や松原まろうど会などが、久保谷風景林の整備、活用における協議会を作り、同協議会と四万十森林管理署が協定を結ぶ必要がある。

② 久保谷山風景林を核としたヘルスツーリズム事業

久保谷山風景林をコアとしたヘルスツーリズム事業を提案する。日本全域でヘルスツーリズム推進の動きが活発化しており、現在 35 の地域でヘルスツーリズム認証プログラムが実施されている。しかし、四国地方でヘルスツーリズム認証地域は一か所も存在しない（2019年2月現在）。そこで、久保谷山風景林及び梶原町南部地域の誇れる地域資源を中心とした観光ツアーでヘルスツーリズム認証取得を目指す。

10-3 久保谷山風景林を活用した具体的事業案

① 久保谷山風景林を核とした梶原町南部地区の観光地化

具体的事業案として、梶原町南部全域（松原地区、初瀬地区）の地域資源を活用したヘルスツーリズムプログラムを展開する。梶原町南部は北部、中心部と比較しても豊かな自然に恵まれている。始めに松原地区の久保谷山風景林やセラピーロード内でのウォーキングやトレッキングでありのままの自然を体感することによって五感を研ぎ澄ます森林セラピー（療法）を提供。

そして、運動を行った後は初瀬地区にある韓国式低温サウナ施設「チムジルバン（レストラン鷹取）」でリフレッシュしてもらい、韓国との交流経験を活かした地元野菜を使用した本格的なキムチ料理の提供。

豊かな自然を活用した森林療法を提供できるのではないかと考えた。

② 久保谷山風景林の道路状況の整備

このような場所を実現していくためには、まず久保谷山風景林が人々にとって出入りしやすいように、安全面で整備していく必要がある。現地調査でも明らかになった久保谷風景林の歩道状況の悪さを解決するにあたり、地域が定期的に行っている一斉清掃行事の際に、地域住民と協力して梶原事務所の職員も同様に風景林の落ち葉や石ころの除去などを行うことで、地域住民に関心を持ってもらい定期的に、自分たちの森を綺麗にする意識もってもらうことで解決されると考えた。

③ 管理・運営の方策

ヘルスツーリズムプログラムを実施するにあたり、運営主体は地域住民が行う。

松原まろうど会は、会長が地域の中心となる人物（下元氏）であり、松原地区の活性化のために地域の祭りやセラピーロードの発展に観光地化に向けて活動している。

地域のことをよく把握している松原まろうど会のような団体が中心となって運営することで、魅力的な地域資源を有効的に活用できるようになる。

また、参加料を徴収することで、地域住民が直接的に恩恵を受ける環境が整うのではないかと考えた。地域でのヘルスツーリズムの取組の中で、地域住民や松原まろうど会の会員が地域の活性化を感じることが出来ると、ヘルスツーリズム事業への積極性も次第に出はじめ、松原まろうど会での活動も活発となる環境が整ってくる。

そうなると、松原まろうど会としてもヘルスツーリズムでの活動を通して、地域のために中心となっている下元氏の後継者となり得る人物の育成にもつながり、新たな地域の中心となる人物が出てくると考えた。

④ 集落支援員の重要性

現在の「個」での活動では高齢化の問題に対応できないため、活動を組織化させ、「組織」として取り組むことが必要である。現在、風景林のステークホルダーとして、地域住民、行政（四万十森林管理署及び梶原町役場）があげられるが、その3者をつなげる役割として「集落支援員」を積極的に活用することが必要だと考える。

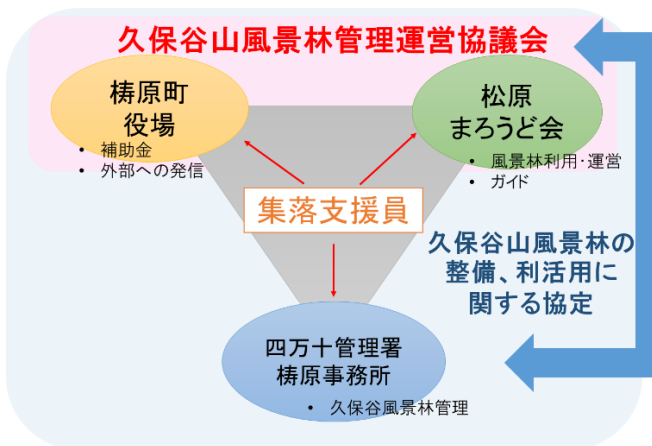
集落支援員とは、地域の実情に詳しく、集落対策の推進に関してノウハウ・治験を有した人材である。地方自治体から

の委嘱を受け、市町村職員と連携し、集落への「目配り」として集落の巡回、状況把握を実施している。

この計画を実施するにあたり、集落支援員が風景林に関わる三者が良好な関係を築けるようフォローすることが重要である。本計画における集落支援員の具体的な活動内容としては、地域住民（松原まろうど会）や梶原町役場に対し、久保谷風景林の管理・活用における協議会の両者の密接な関係作りのフォローをすることや更なる協議会の発展に向けての助言することが挙げられる。

また、森林管理署に対しては風景林の定期的な情報共有を徹底し、その情報を協議会メンバー（梶原町役場、松原まろうど会）に伝達することが必要だと考える。

集落支援員が、四万十森林管理署、梶原町役場、松原まろうど会などの地域住民（団体）の間に入り円滑な話し合いを進めることでより良い関係が構築されるのではないかと考えた。



【図8 久保谷山風景林関係者組織 想定図】

⑤ 地域住民の久保谷山風景林の活用方法

松原住民への久保谷風景林のアプローチ方法としては、現在松原地区では毎月第2水曜日にサテライトデイサービスを行っている。ここでは、地域住民が集まり、梶原町の保健所による健康診断や社会福祉士の方の簡単なカウンセリングを行ったのち、身体を使ったり頭を使ったりするようなレクリエーションが行われている。

サテライトデイサービスの際に、年に1回でも、地域住民の遠足のような形をとり、久保谷山風景林に少しでも興味を持ってもらえるようなイベントを設けることで、地域住民の

久保谷山風景林への関心が高まるのではと考える。

ここでは、開催の時期を5月のシャクナゲの季節に開催し、お花見をしながら地域野菜を使ったお弁当を持参し、森の中でのピクニックする、というイメージを想定する。

また、普段移動手段のほとんどが車である中山間地域の住民にとって歩く機会を設けることで健康推進にも役立つのではないかと考える。

⑥ 梶原町内の小・中学生に対して地域教育現場の確立

松原地区外の梶原町の人々に対するアプローチの仕方としては、梶原町内の人々への取り組みの一つとして、梶原町内の小学生を対象とした教育プログラムが考えられる。

具体的な内容としては、梶原学園（梶原町と小中一貫教育校）と町外の小・中学校との交流学习を設け、交流学习の一環として、久保谷山風景林を活用して、梶原学園の生徒たちが他小・中学校の生徒たちに実際に久保谷山風景林を訪れて、自分たちが育った町の中にある木々や植物などを紹介できるような学習の場を設けることを考えた。

この活動は、自分たちの町の誇れる地域資源や産業を生徒自身が紹介することで、単なる思い出としての認識に留まらず、生徒たちにとっても久保谷山風景林が梶原町にとっても貴重な地域資源であり重要な産業の場として認識させることを目的とする。

11. 結論

現在、久保谷山風景林と地域住民の関係性はあまりないが、風景林の一部を構成している四万十町は風景林を利用しているイベントを行うなどの関係性を有している。

ヒアリング結果から分かった松原地区及び久保谷山風景林の課題として、地域資源（久保谷山風景林）をこれまで以上に利用した地域活性化方法と松原地区のコアとなり得る人物（若者）が必要という2点が明らかになった。この2点を中心に解決策を考える必要がある。

私は、利活用の方策として、①ヘルスツーリズムプログラムを主体とした久保谷森林の観光地化、②その付帯設備としての林道の整備、③作業に応じた収入方策、④運営主体としての集落支援委員の活用、⑤地域住民に対する積極的な広報手段、⑥梶原の若年層に対する利活用、の6点を提案する。

12. 謝辞

この研究を卒業論文として形にすることが出来たのは、お

忙しい中、親身にヒアリング調査にご協力していただいた松原まろうど会会長の下元廣幸様、四国森林管理局四万十森林管理署梶原森林事務所森林官の森田晃喜様、梶原町教育委員会事務局の垣内なつき様、そして、梶原町松原地区在住の皆様のおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

また、本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の馬淵先生に感謝申し上げるとともに、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた馬淵研究室の皆様にご感謝いたします。

10 レクリエーションの森:林野庁(最終閲覧日 2018/11/19)

http://www.rinya.maff.go.jp/j/kokuyu_rinya/kokumin_mori/katuyo/reku/rekumori/

13. 引用・参考文献

- 1 四国森林管理局ホームページ (最終閲覧日 2018/11/19)
<http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>
- 2 集落活動センター「まつばら」:センター紹介 | えいとここうち (最終閲覧日 2018/11/19)
<https://www.eitoko.jp/center/dtl.php?ID=2004>
- 3 松葉川シャクナゲトレッキング | 高知県の観光情報ガイド「よさこいネット」 (最終閲覧日 2018/12/01)
<https://www.attaka.or.jp/kanko/dtl.php?ID=6104>
- 4 一平成 30 年 9 月 農林水産省著 平成 29 年度 国有林野の管理経営に関する基本計画の実施状況
- 5 テクノコ白地図イラスト <http://technocco.jp/> (最終閲覧日 2019 年 1 月 17 日)
- 6 梶原町森林組合 トップページ | Live with forest
<http://www.yusuhara.or.jp/top/index.html> (最終閲覧日 2019 年 1 月 20 日)
- 7 日本ヘルスツーリズム振興機構 <https://www.npo-healthtourism.or.jp/> (最終閲覧日 2019 年 2 月 1 日)
- 8 島根県大田市でヘルスツーリズム | 島根おおだ健康ビューロー <http://www.shimane-ok.jp/> (最終閲覧日 2019 年 2 月 1 日)
- 9 総務省 | 地域力の創造・地方の再生 | 地域おこし協力隊・集落支援員・復興支援員・外部専門家・地域おこし企業人
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000073.html (最終閲覧日 2019 年 2 月 10 日)